

# 万葉学者 現地主義にじむ書簡

万葉学者で文化功労者の犬養孝さん(1907～98)の書簡約40点が、三重県松阪市の古民家でみつかった。戦前の国語教師時代に同じく万葉学者となる故田辺幸雄さんに宛てた手紙やはがきで、台湾に住んでいたころの文章もある。専門家は、万葉学者になる前の犬養さんを知る貴重な資料として注目している。

犬養さんは東京生まれ。1940年代に旧制台北、大阪両高校で教授を務め、戦後は大阪大学などで教えた。「声に出して味わってこそ万葉の心がわかる」と語り、独特の節回しで歌い、万葉集の普及に努めてきた。歌の詠まれた風土を重視し、全国の万葉ゆかりの地を歩いたほか、奈良・飛鳥を愛し、その保存に尽力したことも知られる。書簡を発見したのは、児童文学作家の村上しいこさん(50)。村上さんによれば、松阪市内の築約150年の古民家を今年3月に購入し、5月ごろ、蔵の奥で古いミカン箱をみつけた。

## 犬養孝さんの教師時代40点を発見



犬養さんの書簡と村上しいこさん＝三重県松阪市

箱の中には「犬養孝」と書かれた手紙やはがきが大量に入っていた。以前の古民家の持ち主は、宛先の田辺さんの親戚だったという。

書簡は郵便印などから昭和10年代に書かれたとみられる。横浜市の旧制中学で

国語教師をしていた犬養さんが、長野県須坂町(現須坂市)の旧制中学に勤めていた田辺さんに宛てた手紙



台湾から送られた  
犬養さんのはがき

やはがきで、勤め先の学校や論文の話題などが書かれていた。「信濃の山々には雪がのぞまれ、須坂の秋色もさぞよいことせう」と記され、文面から犬養さんが長野を訪れていたことがうかがわれる。

戦争に関わる内容もみられる。「出征の見送り(横浜の)伊勢佐木町から櫻木町にかけて身動きの出れない時もありました」と記した。

台湾の台北高校に赴任した42年以降の手紙では、「苦力たちがハダシでサトウキビをかちり」「椰子とガジマルの町」「バナナの味は全然ちがいます」な

どと現地の様子を伝えた。一方で、「信濃だよりはいつもなつかしく」「八重の汐路の東支那海をへだててゐることをしみじみと感じて来ます」とも記し、望郷の思いをにじませている。

犬養さんの研究を約30年にわたって手伝ってきた犬養万葉記念館(奈良県明日香村)に協力する会代表の山内英正さん(71)は「犬養先生は大変筆まめですが、戦前の書簡がみつかるのはまれです」と話す。

犬養万葉記念館の岡本三千代館長(67)は「貴重な資料で、2人にこれほど深い親交があったとは知らなかった。目に見える光景や音、空気をいっばい書き留めてある。のちに万葉の故地を巡り、現地主義を大事にした犬養先生らしさが垣間みえます」と話す。



いぬかい・たかし 1907年、東京生まれ。32年に東京大学文学部を卒業し、のちに博士号(文学)を取得。全国の万葉ゆかりの地を訪ね歩き、「万葉風土学」を提唱。故地の自然や景観を保全する活動にも力を尽くした。70年に大阪大学名誉教授、87年に文化功労者。98年に死去。著書に「萬葉の風土」「万葉の旅」「万葉のいぶき」など多数。